

Newsletter

映画英語教育学会 九州支部
The Kyushu Chapter of
the Association for Teaching English
through Movies (ATEM)

第3号
2005(平成17)年11月1日
映画英語教育学会 九州支部事務局 発行

〒803-0835 福岡県北九州市小倉北区井堀1-3-5
西南女学院大学 人文学部 八尋春海 研究室
TEL/FAX: 093-583-5720
E-mail: kyushu_office@atem.org

編集: 與古光 宏・多賀亜紀・中島千春

Contents

page 1	巻頭言	page 2	第7回支部大会ルポ
page 3	第11回全国大会ルポ / 第9回STEM全国大会ルポ	page 4	STEM紀要投稿案内 / 映画ショッキング
page 5	2006年フェスティバル・アイデア募集案内	page 6	会計報告 / 編集後記 / 映画のトリビア

映画英語教育学会に期待するものー 主観的に客観的に少し辛口で

映画英語教育学会 九州支部

副支部長 中谷 安男 (中村学園大学短期大学部)

私はこの学会、というより九州支部が好きである。もちろん、どこの支部もそうかもしれないが、何より人がいい。一緒にいて肩が凝らないし、文学や言語学や教育学を背景に持つ怪しい超党派の集まりなので、学問的議論をしてもかみ合わないのは当たり前。むしろ、「映画が好きだ」という唯一の共通項のもとに、柔軟な思考で愉快地やっている。いや失敬、皆英語の教員という役割も同じではあるが。せつかく、映画を使った英語教育という超ニッチな分野に関わっているので、自由闊達に意見を交わせるのは絶対条件だ。在りし日の文化サロンのように、和気あいあいとやっている中から、自然に刺激的な思考や思わぬアイデアが飛び出す、そんな雰囲気は大切にしたい。

私は映画が大好きである。わずか2時間ばかりの中で様々な生きざまや、想像もしなかった映像が堪能できる。楽しみ方は、個人の価値観に大きく左右されて当たり前、まさに暗い映画館というのは、そのためにあるのだ。自分の世界に浸るべきだ。だから、つべこべ解釈をされると、少し辟易する。それでも、他人の意見に「なるほど」と思わされることもある。『デイトライト』の訳本の共同作業をした時、映画の中で水を浴びるシーンは、キリスト教の「洗礼」を意味し、「生まれ変わる」ことを暗示していると聞いた時は、目からうるこだった。

というわけで、私なりの学会に行く楽しみは、気づかない、知らない映画の名・迷場面が見られるということだ。いつだったか、映画の中の「笑

い」について、というのがあり、これはもう聞く前からわくわくした。また、『魔女の宅急便』を英語で見せるというアイデアもあったが、これには一本取られた。今後是非、学会発表は「お楽しみはこれからだ」であって欲しい。

そこで、一つ提案なのだが、これだけ煌々発想の持ち主が集まっているので、映画英語指導案集などを作ってみたいはどうだろう。これまで大物政治家である八尋先生のおかげで、ずいぶん出版物も増えた。ここでもうひと踏ん張りしてもらおう、というのは甘え過ぎか？

さて、ここから話は少し説教じみってくる。うちの哲学の先生が、学術論文というのは熟察があつてしかるべきだ、と叫んでいた。なるほど独自性と、何より深い考察が必要だ。ニッチゆえ、何を、どうやって、の報告が多い。論文に「何故」があまりないのは寂しい。特定の指導法がなぜ良いと思うのか、なぜそのように言えるのか、それが他の場面でもなぜ有効だと言えるのか。悲しいかな英語教育というのは、学習者の英語力の向上が最終目標である。突き詰めると結果が重要である。『映画英語教育研究』第10号で角山照彦先生も書いていたが、PlanとDoは多いがSeeがない。10年で1つらしい。主観的な思考を客観的に説明するためには、結果をより良い方法で正確に評価しなければならぬ。そして的確な意味付けも。今後、言語能力向上についての説得力ある論文がたくさん出てくれば、「映画英語学会」との差別化も可能であろう。

第7回支部大会レポート

まだまだ残暑が続く中、去る9月17日(土)に、北九州市・小倉北区の西南女学院大学にて、第7回九州支部大会が開催されました。ここは、事務局長の八尋春海先生を初め、数名の支部会員の所属校であることから、2000年3月下旬に、記念すべき第1回支部大会の会場にもなった大学です。以来、再び支部大会(2002年)、さらに全国大会(2003年)の開催校にもなり、九州支部ではお馴染みの会場、といった様相を呈しています。

今回の支部大会も、そのような「我が家に帰って来た」ような、温かい雰囲気の中で、活発に行われました。

まず、支部総会に引き続いて、BOSE社による音響機器の業者発表がありました。様々なサウンド・イフェクトを使って、デモンストレーションをして頂きましたが、その音の鮮明さ、リアルさは驚嘆に値しましたが、その音の鮮明さ、リアルさは驚嘆に値しましたが、映画の音声にこだわりを持つ会員の中には、発表終了後、早速社員の方に熱心に質問されている人も見られました。

そして、今回の支部大会の特別プログラムが、西南女学院大学のデニス・ウールブライト先生による、映画『サウンド・オブ・ミュージック』を始めとする、スタンダードの名曲のミニリサイタルでした。実はウールブライト先生、かつてNHK『のど自慢』にて、外国人出場者として初のグランプリに輝き、かの都はるみさんともレッスンを受けていた、という経歴の持ち主。当日は、大学の米国語学研修の引率から帰国された直後だったにも関わらず、一曲一曲をまるで慈しむように朗々と英語で歌い、素晴らしい歌声を披露されていました。

中でも、『サウンド・オブ・ミュージック』からの、『もうすぐ17歳』(“Sixteen Going on Seventeen”)を歌われる時に、「私には、今15歳の娘がいますが、この歌は、彼氏から彼女へだけではなく、父親から娘へのアドバイスと考えることも出来るでしょうね。」という先生のコメントで、同曲にまた新しい味わい方が加わりました。他にも、米国南部で猛威を振るったハリケーン・カトリーナで被災した、ニューオーリンズの人々へ捧げられた、ガーシュインの『サマータイム』(“Summertime”)や、先生が20年以上前に聞かれてすぐに気に入ったという『ビルマの豎琴』からのナンバーなど、延べ13曲に来場者は全員聞き惚れていました。

ところで、今回の支部大会のほぼ1ヶ月前に当たる、8月下旬に盛大に開催されました、九州支部恒例の夏季懇親会にて、一足早く支部の仲間入りをさ

れていた新会員の皆さんが、この日、多数出席なされていました。ATEM各支部の中でも、一際順調に会員数を伸ばし続けている九州支部ならではの、温かさや大らかさを、本業(?)である支部大会でも、随所に感じ取って頂けたことでしょう。この日も、メインである研究発表を含む、大会そのものはもちろん、その後の懇親会も大いに盛り上がったことは、言うまでもありません。

九州支部にご関心がある方、まずは次回の冬季(または春季)懇親会にだけでも、お出でになりませんか?

(文責: 與古光 宏)



(上) 歌うウールブライト先生
(中) *Sound of Music* に聴き入る聴衆
(下) 懇親会、大いに盛り上がる!

■■■■第11回全国大会ルポ■■■■

去る10月1日、神奈川県相模市、相模(さがみ)女子大学においてATEM全国大会が行われた。通称「相撲(すもう)」女子大と呼ばれると聞いていたが、実際には、キャンパス内の道案内をしてくれたのは笑顔の素敵な、とてもスマートな女子大生だった。(当然か...)

本大会は、「異文化・語学指導教材としての映画」というテーマのもとに、韓国STEM会員による発表を含め18の研究発表が行われ、内容的にも大変充実した学会であったと思う。和やかな雰囲気の中で、各会員が情報交換や意見交換を行うことができ、私にとっても実りの多い一日となった。

まず、「映画の暗号を読み解く」と題して、明治大学、越智道雄先生による基調講演があったが、他民族国家アメリカにおけるエスニシティの諸問題が、ハリウッド映画の中で、時代の変遷とともに如何に描かれてきたかに関する、大変興味深い講演であった。中でも、「エスニシティの消去」(例えば、「ザ・シンプソンズ(The Simpsons)」のキャラクターたちが、実は黒人でありながら、その肉体的特徴がわざと消し去られているなんて、ボンヤリものの私は、今までちょっと気づかなかった!)というコンセプトによる映画の「暗号解読」は、今後の私の映画の見方を変えることになるだろう。

基調講演に続き大講義室で行われた、京都外大の倉田誠先生、Graig Smith先生による授業実践報告では、映画を使った異文化コミュニケーション教育法が提案された。ワーキングガールのワンシーンを使い、談話当事者たちが、相槌、(相手の発話の)繰り返しや付け足しなどを行いながら、会話を好ましいものにしてゆく過程を、台詞やジェスチャーとともに分析。異文化コミュニケーションを授業で扱う際に、非常に有効なアプローチである(って言うか...これスゴイ!)という印象を持った。また、発表者お二人のコメディタッチの会話実演には、個人的にATEM最優秀演技賞を差し上げたい。

この他、リピーティングとシャドーイングの効果的な組み合わせを可能にするソフト「フラッシュ」を使った授業の紹介(創価大学、岡崎弘信先生)や、CALL教室での授業風景を取り込んだ発表など、早速明日から実践してみたい内容の発表が多数あった。

(文責:中島 千春)

■■■第9回STEM全国大会ルポ■■■

去る4月30日に、韓国で行われたSTEMの全国大会に、九州支部から私を含めて、5名が参加しました。学会の開催が、ゴールデンウィークの真只中ということもあり、渡航費が予想以上に割増料金で、かなり悩んだ末の渡航決定でしたが、「冬ソナツアー」という不純な動機で参加した次第です。1時間弱の飛行時間にもかかわらず、機内で無料の耐ハイを堪能した参加者もいたようです...(笑)

仁川空港で、関西支部や関東支部の参加者と合流、目的地の関東大学校までは、出迎えの小型バスで約5時間かかりました。お昼は車中でお弁当、と言っても一流ホテルのオリジナル弁当で超豪華!至れり尽くせりのバスの旅でした。宿泊は、関東大学校のゲストハウスでしたが、大学の構内にそびえ立つ、まるで一流ホテルのような外観で、一部は学生寮として使われているそうです。1階に設置されている、自動販売機の値段をみてびっくり。日本円で30~40円位でした。部屋はシックながらお洒落で品格があり、とても快適でした。

滞在中は、何から何までVIP扱いで、外出してゲストハウスに戻る度に、十数人の学生達がバスを出迎えに来てくれました。学会の後の、懇親会の2次会でカラオケに行きましたが、50人位がゆったりと座れる高級クラブのような豪華な部屋で、舞台には大きなスクリーンがあり、タンバリンを叩く係が3~4名、歌う人を盛り上げる係(女子学生が「きゃー」と言ったり)など、役割分担がしっかりと段取りされていたようです。舞台横のトイレに鍵が無いのにはびっくりしました。因みに、韓国の公衆トイレの各個室にはトイレトペーパーが無く、手洗い所の横に1つ設置されていて、自分で予め手に持って個室に入る、というシステムです。また変な話になりますが、和式トイレのオマルの向きが、日本と逆さま。つまり、ドアに向かって座る、というレイアウトです!!

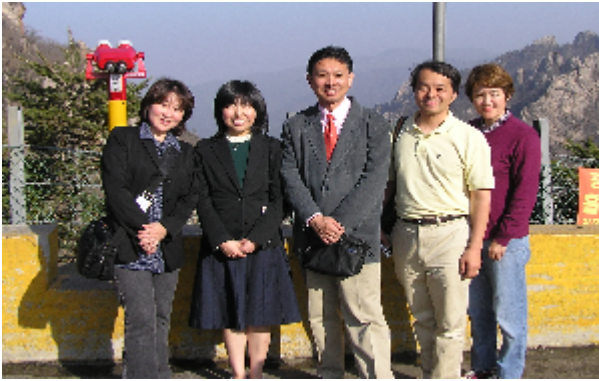
意気投合した関東大学校の女性教授と歓談していたら、イケメンの男子学生が入って来て、彼女に何か囁きました。実は、その学生は、彼女の本日のボディガードだったのです。大学の女性の教員(SP=Special Person)は、帰宅時に何かあってはいけないので、男子学生(SG=Special Guard)が自宅まで送るそうです。何とも羨ましい!! 記念に3人で写真を撮りました!

実は、辛いのは少々苦手な私でしたが、今回の旅ですっかり「辛党」になり、暫く真っ赤な色の料理が続いたことを付け加えておきます。古き良き時代の日本の風習がまだ残っている韓国に、すっかり魅了された2泊3日の旅でした。

(文責:熊抱 ゆかり)



於 第9回 STEM 大会
「冬ソナ」の展示場でピアノを演奏される熊抱先生



於 第9回 STEM 大会
熊抱先生、鶴田先生、高瀬先生、鹿子木先生ご夫婦

STEMジャーナル投稿案内

ATEMの姉妹学会であるSTEMは、年に2回ジャーナルの発行をしております。STEMは、運営資金を獲得するために、韓国内の企業や韓国の文部省へのアピールを行っておりますが、このジャーナルは、研究活動の証拠として大事にされています。海外からの研究論文の投稿があると、評価が高くなるそうです。

そのような理由のために、発行の時期が近づくと、日本の研究論文で未発表のものや素晴らしい内容のものを送って欲しい、というSTEMからの依頼が、高瀬にやって来ます。理事の先生方にも呼びかけをしておりますが、なかなか思うように原稿が集まらないので、九州支部の会員にもその情報を今まで流してきました。その結果、九州支部からは毎年、研究論文がSTEMジャーナルに掲載されてきました。今後も、その傾向は続くと考えられます。STEMのジャーナルは、レフリー付きのきちんとした研究論文集で、約200~220ページ程の厚みのあるものです。ATEMからの投稿は、前述の理由から結構フリーパスに近い状態で掲載されます。

発行は、大体毎年2月と9月に発行しておりますので、依頼があるのはその2ヶ月前頃です。自信のある方は一度STEMジャーナルに投稿されてみては如何でしょうか？投稿希望の方は高瀬までご連絡ください。

(文責：高瀬 文広)

映画ショッキング Vol.03

~映画の中の、私の「身体」~

私は、幼いころから映画が大好きで、それは今も変わらない。しかしながら、ここ数年は仕事上の関係から年間100本以上の映画を観ているとはいえ、心の奥まで入り込んでくる映画は多くない(というよりも無い)。恐らく映画というものは文学と一緒で、その時の自分の感受性が大きく左右するものなのだろう。私の愛する映画は決まって70年代後半~90年代の青春期に観た映画である。そしてその全てが「ダンス映画」である。

まず初めに、幼いころ強烈な衝撃を受けた『サタデー・ナイト・フィーバー』。ジョン・トラボルタが冒頭に吐くセリフ“Fuck the future.”は今でも忘れられないセリフである。最近も仕事との関係から10数年ぶりに観直してみたのだが、やはり若いころのトラボルタは踊りも上手いしカッコ良かった。80年代に入ると『コーラス・ライン』が私にとっては忘れられない映画となる。とにかく出演しているダンサーたちの踊りに圧倒されっぱなしなのだ。若者の青春そのものを描いた映画でもあるこの映画の中で、ダンサーの1人ビビ・ベンソンが言う“Even if I lose, I won.(オーディションに落ちてでも私は勝ったと思う)”というセリフは強烈な印象として残った。他にも『レイン・マン』のチャーリーとレイモンドが踊るシーン、『ダーティ・ダンシング』のパトリック・スウェイジのエネルギッシュな踊り、そして90年代にはあのアル・パチーノが主演する『セント・オブ・ウーマン』での彼のタンゴは、一瞬にして彼を「私のNo.1スター」にしてしまった。

どうして私たちはダンス映画に惹かれるのだろうか。そこには様々な要因が潜んでいるに違いない。少なくとも私の場合は、単純に映画の中に溢れる「若さ」や「エネルギー」が直に私を襲い、まるでボクシングの試合を間近で見ているかのような臨場感で包み込むからだと思っている。そのとき私は映画という架空の状況の中に、自分自身の身体を、つまり生の感覚という「リアル」を見出しているのである。

次回のこのコーナーは、宮内さんをお願いします！

(大木 正明)

2006年フェスティバル アイデア募集案内

2001(平成12)年5月28日(日)に第1回九州映画英語教育フェア(九州支部主催)を中村学園大学にて開催して、早4年の歳月が過ぎました。この年は前日の27日(土)に、映画英語教育学会の学会全国大会も同時期に開催され、大盛況でした。

今回更なる支部発展の為に、他学会支部と共同主催の『映画英語・比較文化・コミュニケーション・フェスティバル(仮称)』を、来年辺りに開催しようと計画中です。共同主催の学会は当学会の他に、「日本コミュニケーション学会」と「日本比較文化学会」の3学会です。日本コミュニケーション学会ではすでに九州支部の総会で実施が承認されておりますし、理事会にも報告しております。私どもの映画英語教育学会におきましても、皆様ご存じの通り支部総会で承認され、また理事会でも企画については報告しております。

詳細な企画の前に、広く会員の皆様から多くのアイデアを頂いて、立派なフェスティバルにしようと考えております。皆様の忌憚のないご意見をお待ちしております。できれば、「自分は~のようなことが出来るので、企画に入れてはどうか」というような形が良いです。

例：高瀬 文広

著作権問題セクション(映画を使用するときの著作権問題について説明する)

「日本語コミュニケーション」(自己開示を通してコミュニケーションを学ぶ)

尚、アイデアやアドバイスは下記のEメールアドレスへお願いします。

宛先：高瀬 文広 アドレス takase@mnx.jp
件名：「フェスティバルアイデア(氏名)」
をお願いします。

現時点では下記の様になっております。ご参考ください。

2006年フェスティバル概要

0. 目的：

「映画英語教育学会」、「日本コミュニケーション学会」そして「日本比較文化学会」に関係のある研究者のみならず、中高大の教職員や生徒&学生、さらに一般市民の参加を含めた形でのフェステ

ィバルを開催し、3つ学会のPRと同時にこれらの分野の学問への興味関心を持ってもらうことを目的とする。これにより会員の獲得と同時に、支部の財源を増やすきっかけにしたいと考える。

1. 主催：映画英語教育学会(九州支部)
日本コミュニケーション学会
(九州支部)
日本比較文化学会(九州支部)

2. 後援：福岡県教育委員会
福岡市教育委員会

3. フェア開催時：平成16年 夏か秋

4. 場所：西南学院大学

5. 参加者：映画英語教育学会会員、日本コミュニケーション学会会員、日本比較文化学会会員その他これらの学会に関心のある一般人。中学、高校、大学、専門学校等の教職員や生徒&学生。
(参加見込み：1000名)

6. 入場料：無 料

7. 内容：

次の3つのゾーン(zone)に分けて参加型のフェスティバルを開催する。

映画英語教育・ゾーン
コミュニケーション・ゾーン
比較文化・ゾーン

各ゾーンに更に小さなセクションを設ける

(例)映画英語教育・ゾーン

- ・ 映画翻訳セクション
- ・ 映画を使った授業体験のセクション
- ・ 映画試写会セクション
- ・ 映画オタクコンテストセクション
- ・ 著作権問題セクション等

各ゾーンには、いろいろな展示をするコーナーを設ける

(例)映画英語教育・ゾーン

- ・ 映画英語関係書籍コーナー
- ・ 映画ソフトコーナー
- ・ 映画グッズコーナー

3つのゾーンの中(または外)に下記のようなセクションも設置する

就職相談セクション

- ・ 通訳&同時通訳(コミュニケーションゾーン)
- ・ フライトアテンダント&グランドスタッフ(映画英語教育ゾーン)
- ・ 教師志望(高校&大学)(映画英語教育ゾーン)
- ・ 出版関係(比較文化ゾーン)
- ・ 旅行関係(映画英語ゾーン)

会 計 報 告

平成 16(2004)年度 ATEM 九州支部会計報告
収支決算書 2004 年 1/1 ~ 12/31 までの分

項目	収 入
前年度繰越金	219,512
本部事務局補助金	50,000
書籍売り上げ代	2,000
印税(「映画が語る現代 社会」)	145,105
収 入 合 計	416,617

項目	支 出
ニューズレター作成費	1,344
ニューズレター郵送費	7,520
支部大会経費	16,209
支 出 合 計	28,755

収入合計 - 支出合計 = 387,862 円 次年度繰越へ

映画英語教育学会本務事務局での予算年度は、1月1日～12月31日になっているので、本支部の会計年度もこれに倣っています。上記の平成16年度の収支決算書は、本年8月21日の支部運営委員会、並びに9月17日の支部総会にかけられ、承認されたものです。

(報告：事務局長 八尋 春海)

編集後記

ATEM 九州支部ニューズレターは、今年より年2回の刊行となります。創刊号は2004年9月、第2号は2005年4月、そして第3号が、この度2005年11月に発刊される運びとなりました。今回も支部長の高瀬先生、副支部長の中谷先生、事務局長の八尋先生、そして熊抱先生、高木先生、大木先生と様々な会員の方に、原稿を執筆していただきました。多忙の中、快く引き受けていただいた皆様のご協力に、編集委員一同心より感謝申し上げます。内容も文体も、ご覧のとおり各会員の個性がそのまま伝わってくるような興味深いものばかりで、私たちも、改めてこのATEM九州支部の「ニッチさ」を実感させられている次第です。

年2回の刊行となり、ますます多くの会員の皆様へ原稿を依頼することになるかと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。また、今号は初の試みで、雰囲気をもよりリアルに味わっていただけよう、写真も数点掲載しております。お楽しみいただけましたでしょうか。ニューズレターに関する、皆様からのご意見・ご感想等も、ぜひお寄せください。(宛先：yokomitz@ybb.ne.jp)

(文責：多賀 亜紀)

映画のトリビア vol.03

「すべてはテレビから始まった…」

私にとって、幼い頃のTVはまさしく魔法の箱であった。その頃見ていた番組は、いまだに脳裏に残っている。その当時は何といってもアメリカのTV番組全盛期で、一番の情報源となっていた。特に映画で活躍していた俳優たちの名前を冠したホームドラマは楽しみであった。ルシール・ボール・ショー、ロレッタ・ヤング・ショー、ドナ・リード・ショー、パティ・デューク・ショー等、番組中にあらわれるアメリカの家庭の様子にはただただ魅入られたものである。

今ではすっかり影をひそめた西部劇にも名作があった。スティーブ・マックィーンの『拳銃無宿』、『ガン・スモーク』、『ララミー牧場』(故・淀川長治氏の解説で有名になった)、『ローン・レンジャー』、『アニーよ銃を取れ』、『クリント・イーストウッドを輩出した伝説の『ロー・ハイド』など、ああ、懐かしい!

それに、忘れてならないのは、探偵物。『サンセット77』、『サーフサイ6』には、若手の俳優がわんさか出ており、毎週うっとりとして見とれていた。『名探偵ダイヤモンド』、『ピーター・ガン』なども忘れがたい。『87分署』シリーズには、確かジーナ・ローランズが出ていた記憶がある。(違っていたらすみません!)『ER』のさきがけともいえる『ベン・ケーシー』、『ドクター・キルデア』(リチャード・チェンバレン主演)にも夢中だった。

現在、すっかり様変わりしたTVの世界だが、あの当時の熱心さで見ている番組はかえって少なくなってしまった。残念!

(高木 仁美)